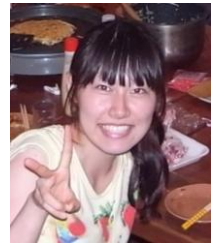


高齢者の居住空間に関する研究 —奄美大島の事例を通して—



K07045 小林 彩夏

Keywords

高齢者 居住空間
近所づきあい モノ

1. 研究背景

日本の高齢者は家族や友人に支えられ、自分の長生きを周囲が喜んでくれることに幸せを感じるという。しかし、高齢者の一人暮らしが増えている現在、家族を拠りどころとするのは難しい場合も多い。そのため、高齢者の生活において近所づきあいの在り方が重要であると考ええる。また、高齢者の居住空間に注目するとき、かれらを取り巻くモノの持つ意味が重要となる。高齢者と回想は切り離せないものであり、過去の記憶と結びついたモノは、高齢者にとってどのような意味を持つのだろうか。

2. 研究目的

本研究では、高齢者の居住空間について、近所づきあいとモノに着目し、集落、住居、居室という流れで明らかにする。集落における高齢者のつき合い空間、高齢者の住居空間の使い方、近所づきあいにおけるモノの役割、高齢者にとってのモノの重要性について分析・考察する。

3. 研究方法

2010年7月25日～8月17日の計24日間、鹿児島県奄美大島龍郷町において現地調査を行った。調査対象地は、I集落と、A集落の海岸沿いのK地区、そこから少し奥に入ったS地区である（図1）。その際に採集した住居内平面図（生活物品を含む）、インタビューデータをもとに分析・考察を行っていく。



図1 調査対象地

4. 調査地概要

4.1 行事

代表的行事として、古い稲作儀礼のショチョガマと平瀬マンカイがある。現在、この両方が残っているのは調査地だけであり、町全体で保存に努めている。

4.2 自治組織

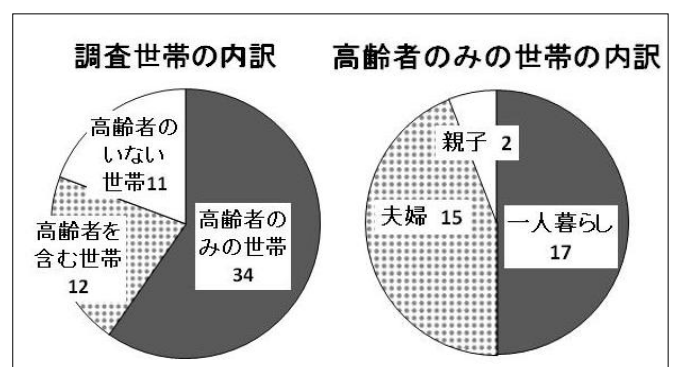
集落には、青年団、壮年団、婦人会、老人クラブ、子供会・子供育成会という、組織団体が存在する。参加するか否かは個人の自由であるが、多くの人が何らかの団体に属している。集落内の連絡事項の伝達手段としても重要な役割を果たしている。

4.3 家族構成

高齢化率の全国平均が20.1%であるのに対し、鹿児島県は24.7%、龍郷町は29.0%である（平成17年度国勢調査より）。日本国内でも高齢化が顕著な地域で、高齢化率21%以上の超高齢社会である。家族構成は、夫婦または一人暮らしが多い。世帯主年齢の高齢化が進み、老人単独世帯も多い。

実際に調査を行った57世帯のうち、高齢者のみの世帯は34、高齢者を含む世帯は12、高齢者のいない世帯は11である。さらに、高齢者のみの世帯のうち17世帯は高齢者の一人暮らしである（表1）。なお、本研究では65歳以上を高齢者と定義している。

表1 家族構成の内訳



5. 分析

5.1 集落内の集う場所

5.1.1 集う場所の分類

集落内には多くの高齢者の集う場所が存在する（図2）。それらは、集い方の性質の違いによって2種類に分類することができる。集まる日時やメンバー、目的などが決められた「定期的に集う場所」と、個人的に気の合う仲間と集まる「不定期に集う場所」である。

集落内には、集まる日程が決められた場所だけでなく、行きたいとき自由に行ける場所が点在している。高齢者にとっては、家に引きこもらず、日々の楽しみを見いだせる場所として重要である。



図2 集落における集う場所

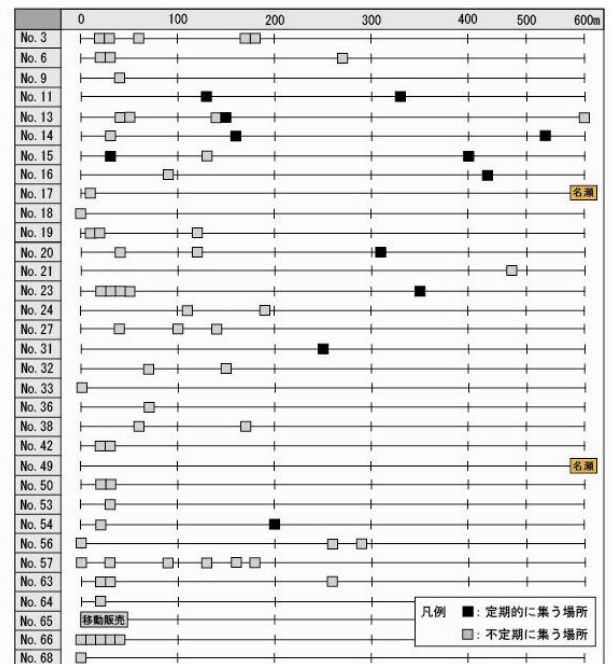
5.1.2 距離

集う場所と自宅からの距離の関係性について考える。有効回答数は33件である（表2）。

定期的に集う場所は多少遠くても足を運ぶことがわかる。最大で530m離れたところまで足を運んでいる。基本的に集落内の移動は、徒歩または自転車である。その途中途中の休憩に、商店などが利用され、そこでコミュニケーションがうまれる。

対照的に、不定期に集う場所は隣近所が多く、自宅から150m圏内に集中する。これは徒歩3分程度の距離であり、体に負担のかからない距離ともいえる（高齢者の10m歩行速度の平均値0.75m/secを用いて算出）。

表2 自宅と集う場所の距離の関係



5.1.3 生活パターン

調査地の男性高齢者は、5～7時に起床して、一日畑仕事をし、21～23時に就寝する人が多い。女性の場合も起床、就寝の時刻は変わらず、午前中は掃除や洗濯などをし、午後は畑仕事を手伝ったり、近所でおしゃべりをしたりする。基本的な生活パターンが似ているため、集落内でのコミュニケーションも容易になる。

一方で、決まった仕事がある人、習い事の稽古で頻繁に市街地へ行く人などは、集落内の親しい人も少ない傾向にある。これは、老人クラブなどの集いにあまり参加できないなどが理由である。集落の自治組織が、高齢者の交友関係に大きな影響を持っていることがわかる。

5.2 住居におけるつきあい

5.2.1 住居空間の使い方の分類

住居空間の使い方は大きく3つに分類できる。1つ目が、空間の使い分けを全くしない場合である。誰が住居のどこまで上がっても問題としない。一人暮らし世帯や体の不自由な人がいる世帯に多く、分類可能な38件中10件であった。2つ目が、つきあい空間と個人の空間を区別している場合である。住人の生活空間と、つきあい空間が区別されている。親子世帯や部屋数の少ない世帯に多く、17件あった。3つ目は、つきあい空間と個人の空間を区別し、さらにつきあい空間をつきあいの相手や内容で使い分けしている場合である。夫婦世帯や、部屋数の多い家に住んでいる世帯に多く、11件あった。

例として、No.20の事例をあげる（図3）。高齢者夫婦の二人暮らしで、3つ目のパターンに分類される。玄関から奥に向かうに従って、つき合いが親密になっている。

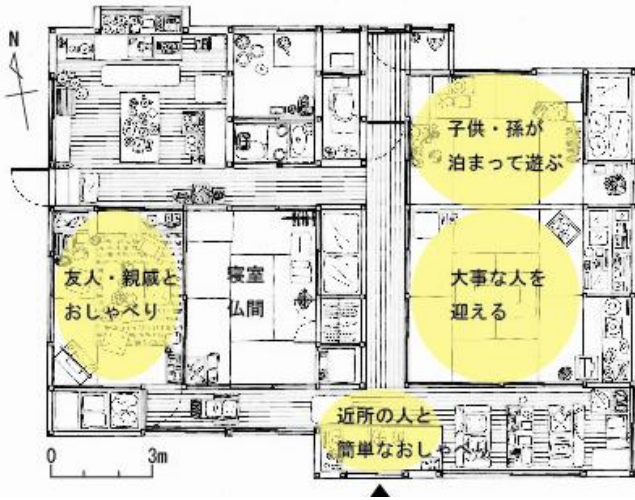


図3 N氏宅の住居空間の使い方

5.2.2 つきあいの道具

住居内には、住人本人が使う以外のモノも存在する。囲碁をする人がいないのに碁盤があったり、子供がいないのに子供用のおもちゃがあったりする。これは、つきあいの輪を広げたり、つきあいの時間を長くするのに役立つ。つきあいの時間を長くするものとして、おもてなしもあげられる。少し顔を出して帰るつもりだったのが、おもてなしを受けることで、自然とゆっくり話をしてから帰るという流れに変わる。単純に客をもてなすという気持ちだけでなく、少しでも長い時間いてもらうための手段として使う意図もあると考えられる。

5.3 居室とモノ

5.3.1 高齢者の居室の特徴

高齢者の居室のモノを数え上げた結果、高齢者の居室を特徴づけるモノとして、写真（自身の若い頃、子供や孫）、手作りのもの、賞状、植物、貝殻、薬、和室の椅子、メモ書きが挙げられた（写真1）。これらは、高齢者の精神的な拠り所になっているモノと、身体的な状態にかかわるモノに分類できる。前者は、高齢者に日々の楽しみを与えたり、寂しさを忘れさせたりする。後者は、足腰が弱くなる、記憶力が低下するといった、高齢者にみられる身体的な特徴を反映している。

前者の詳細について述べる。自身の若い頃の写真を飾っているのは、60代後半や90代後半、足腰が弱い人やほぼ寝たきりの人がいる世帯に多い。子供や孫の写真、

子供や孫がくれた手紙を飾っているのは、耳が不自由な人のいる世帯で特に多い。手作りのものを飾っているのは、80代と90代前半、そして女性に多い。賞状やトロフィーを飾っているのは、男性のいる世帯に多い。住居内に植物が多いのは、60代後半や70代前半の人、または女性に多い。貝殻を飾っているのは、親子世帯、夫婦世帯、一人暮らし世帯と徐々に割合が高くなる。

次に後者の詳細について述べる。和室に椅子を置いている世帯と、すぐ手の届くところに薬を置いている世帯は、足腰が弱い人のいる世帯で多かった。すぐ手の届くところに薬を置いている世帯、メモ書きが多い世帯は、男性のいる世帯に多い。メモ書きが多いのは、親子世帯、夫婦世帯、一人暮らし世帯と徐々に割合が高くなる。



写真1 居室に飾られている写真と貝殻

5.3.2 大切なもの

高齢者の大切なものとして、旅行の写真、海で拾った貝殻、寄せ書き、形見の品、友人がくれた置き物、手紙・年賀状、アルバムなど様々なものがあげられた。これらのモノに共通するのは、誰かとの思い出が詰まっていることである。それらがある場所も共通している。アルバム以外は、居間や寝室などに見えるように飾ってあった。床の間に置いてあることも多い。どの世帯でも、大切なものはすぐ目につくところに置かれていた。

6. 結論

6.1 近所づきあいからみる高齢者の居住空間

集落内には強い集団意識があり、それゆえに排他的でもある。しかし、この強い集団意識が、近所づきあいを密にしている。高齢者たちは日々の結びつきを、決して強要されることなく、無意識的に欲している。集落のなかで、高齢者たちは、どこかでお互いの存在を意識しながら生活している。そして、近隣住人や血縁関係にある

人は、高齢者を日々気遣いながら支えている。高齢者の居住空間とは、強い集団意識によって守られながら、一人一人がゆるく確実に結びついた空間である（図4）。

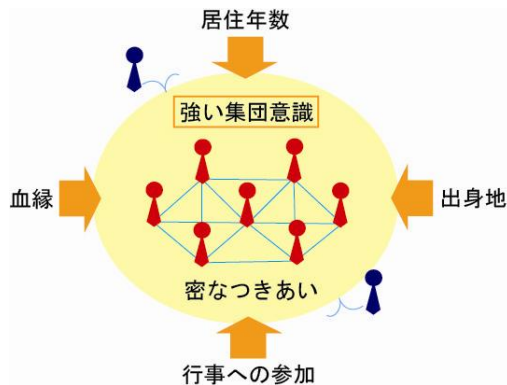


図4 近所づきあいからみた高齢者の居住空間モデル

6.2 モノからみる高齢者の居住空間

高齢者の身の回りには、人とのつきあいを豊かにするためのモノや、過去の記憶と結びついて回想を引き起こすモノがあふれている。過去の記憶と結びついたモノは、回想の世界に入る扉のようなものである（図5）。これらのモノは、高齢者を日々の寂しさから救い、幸せな時間を過ごすための手助けをする。高齢者にとって幸福な居住空間とは、高齢者が充実したひとときを過ごすために必要なモノを、多量に内包した空間といえる。

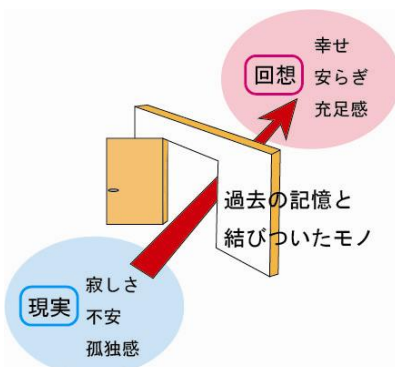


図5 モノの働きのモデル

6.3 高齢者の居住空間とは

集落空間には、人びとの強い集団意識が反映されている。その中には、高齢者ひとりひとりが持つモノを多量に内包した空間が点在している。それらの空間のいくつかは、互いにゆるくつながりながら、近所づきあいにみられる小さなコミュニティを形成している。そのつながりを維持するためには、移動を伴い、顔を合わせることを求められる。さらに、そのコミュニティ同士もまた、ゆるく結びついている。結果として、直接的なつきあいがなくても、存在を知っていたり、つきあいのきっかけ

を得たりする。高齢者の居住は、他者との交流なしには成立しにくい。

高齢者の暮らしは、回想を引き起こすモノに囲まれている。高齢者はそれらを媒介に、空間を移動しながら、他者と交流する。高齢者の生活にとって、回想は不可欠である。さらに、その時間を他者と共有することが重要になる。このような時間の生まれる空間が、集落にはいくつも存在するのである（図6）。

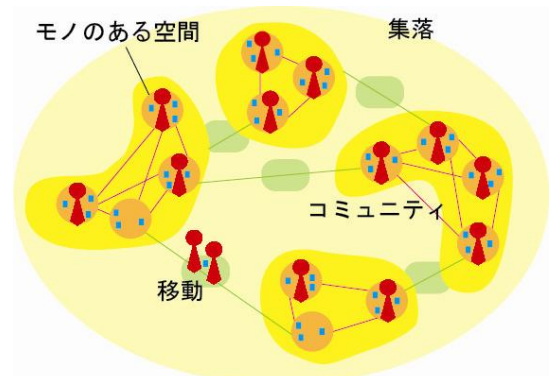


図6 高齢者の居住空間モデル

参考文献

- 1) 龍郷町誌歴史編編さん委員会『龍郷町誌 歴史編』昭和63年
- 2) 龍郷町誌民族編編さん委員会『龍郷町誌 民族誌』昭和63年
- 3) 鹿児島県大島支庁総務企画課『平成21年度 奄美大島の概況』平成22年
- 4) 内堀基光「序 ものと人からなる世界」『「もの」の人間世界』1-22.岩波書店.1997年
- 5) 高見澤たか子『自立する老後のために』晶文社.1998年
- 6) 富澤公子「ライフサイクル第9段階の適応としての「老年的超越」」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要第2巻第2号』.2009年
- 7) 高田真実.田中直人「鹿児島県、奄美大島住民の近所づきあいに関する意識」『日本建築学会近畿支部研究報告集』637-640.平成17年度.
- 8) 高田真実.田中直人.老田智美.井上洋之「鹿児島県奄美大島住民の集落内における会話の発生空間」『日本建築学会大会学術講演梗概集（近畿）』473-474.2005年
- 9) 上野和男.大越公平『現代のエスプリ』194：「奄美の神と村」至文堂.1983年